

本号のテーマ：「子どもは Active Learning の天才」

○ はじめに

先月 24 日は中秋の名月で、1 歳と 8 ヶ月になる孫を抱っこして月見をしました。

「きれいね」と繰り返し声を出しながらお月さまに向かって大きく手を伸ばし、それをつかもうとしている孫を見ているうちに、「名月を取ってくれろと泣く子かな（一茶）」の情景が重なって、つい新しい味付けに興じてしまいました。

まず大きく伸ばした手でお月さまをパッとつかむ仕草を見せます。さらには、つかんだ手を口までもってきて、こともあろうに「きれいなお月さま」をパクッと食べてしまうのです。すると結構大受けて、上手に私のまねをし始めました。さてさて、品のない食べっぱなしのフィニッシュではいけないと思い、「食べたと思ったらまだちゃんとまん丸お月さまがお空にあって、『はあ、よかった』』という幕引きに努めたのですが……。



子どものものにとらえ方や感受性は時として大人のそれを超えるので、大変興味深いのですが、同時に、関わる大人はあまり無責任なことにはできないかと自戒した次第。子どもは、そもそも **Passive Learning** (受動的な学び) ではなく **Active Learning** (能動的な学び) を行う天才なのだと思います。

そういえば我が子も 3 歳のときだったか、車窓から見えるお月さまが、車の移動によって違った方角に見えたとき、「こっちにもお月さまがあるね！」と目を輝かせながら発見の叫び声を発したことがありました。

子どもが「どうして」を多発するようになると、親をはじめとする大人たちは結構閉口するものですが、本号では小学2年生が国語の時間に見出した大問題を投げかけられた校長が、心地よい悪戦苦闘をさせていただいた話を紹介することにします。

○「タンポポのちえ」

それは5月初旬のことでした。

「校長先生、タンポポには脳みそがないのにどうして知恵をはたらかせることができるの」・・・2年生のあるクラスの子どもたちが大挙して校長室を訪れ、こんな難問を投げかけてくれました。国語で「たんぽぽのちえ」を勉強してぶつかった疑問であるとの説明もありました。



あいにく（私にとっては幸い）来客中でありましたので、もう一度昼休みに出かけてもらうことにしました。お客様が帰られた後、まず2年生の国語の教科書に当たり、私の「知恵」をしぼりました。久し振りに脳みそに汗をかいて導いた説明を演題用のロール紙4mほどにまとめ、プレゼン準備完了です。

昼休み、校長室に訪れた子どもたちは、壁いっぱい広げたロール紙を見て歓声を上げましたが、勝負はそこからです。・・・やがて説明はロール紙の右端まで来ました。

「・・・というわけで、たんぽぽは植物で脳みそはないけど、生きるためのすごい仕組みがあるでしょう。まるで知恵をはたらかせて生きているみんなたち『みたい』だね。」

理科的な説明を抜きにして、「～みたい」であることをうまく表したものとしてまとめましたが、さらに決定打を試みました。

当時校長室には、恩師からいただいて大事に育てていたヤツガシラ（サトイモ科）が50cmほどの高さに育ち、涼しげに葉を茂らせておりました。



〔ヤツガシラ：サトイモの一品種。親芋を中にしていくつもの子芋が出て、ひとかたまりに大きくなる。〕

「ここにあるヤツガシラという植物にも『知恵』がありそうだよ。今ヤツガシラの葉っぱはどっちを向いているかな。」

「明るい窓の方。」と、子どもたち。

「そうだね。お日さまの光が入ってくる窓の方を向いているよね。これをね、反対向きになるように水盤を回しておくよ。明日の今頃この葉っぱがどっちの方を向くか見に来てごらん。脳みそがないのにお日さまの光がどっちからいっぱい届くかわかっちゃうのかもしれないよ。」

翌日、昼休みの校長室は大勢の子どもたちに占拠され、次から次へと歓声が上がりました。この2年生の学級が「ちえをはたらかせよう」という学級目標を生み出したのは、その後間もないことでした。

○ おわりに

子どもたちは様々な発見をしますが、特に解決しないではいけない問題を発見して探究心に火がついた時には、自ら進んで探究の過程を歩み出します。そうになると指導者は大きな交通整理をしたり相談に乗ったりするだけでよくなります。

よって、子どもが本来の **Active Learner** ぶりを発揮できるような場を提供するのが教師の務めであるように思います。教師という仕事の醍醐味は、実は、子どもから学ぶことの感動の深さにあるような気がしています。